

東京言語研究所 2026年度春期講座

		講義概要（講師名・所属）
1日目 4月11日 (土)	1 限	日本語文法理論 動詞基本形は何を表すのか (川村大・東京外国語大学教授)
		動詞基本形（スル）、動詞連用形＋タ（シタ）、動詞テ形＋イル（シテイル）は、普通「時間的意味を表す」形、即ちテンス・アスペクト形式だと言われます。それが全くの間違いだとは言いませんが、そのような理解はもしかしたらかなり一面的なのかもしれません。 運動動詞のスルは普通「未来」を表すと言われます（「おれは絶対社長になる」）が、その「未来」というのはかなり限られています。また、運動動詞のスルは時に眼前の事態を描写する場合もあります（「雨が降ります 雨が降る」「ああ、家が燃える、燃える……」）。また、ある環境では「過去」の事態を表すこともあります（歴史的現在の場合、年表や日記の記述）。そして、御存じのように一般論をはじめ時間的意味とは無関係な事柄も表します（問い返し、受理、行為指示、メモ書き、等々）。「スル、シタ、シテイルは何らかの時間的意味を表し分けている」さらには進んで「スル、シタ、シテイルは時間的意味の表し分けのために存在する」という（何となく世間に浸透している）理解を見直す糸口を、動詞基本形を材料として探りたいと思います。
		調音音声学 (中川裕・東京外国語大学名誉教授)
		春期講座では、2026 年度後期開講の「調音音声学」で扱う内容に触れながら、自分の発音を調整し制御する技能を身につけるための勘所をいくつか解説します。伝統的に調音音声学の授業では、発音器官の模式図を用いながら「内省」と呼ばれる主観的観察の訓練をします。その際に、手軽にPCで扱える音響分析アプリを利用したり、インターネット上で視聴できるMRI 撮像データを参照したりすると、その主観的観察の訓練を効果的に行うことができます。今回の講座では、(1) 破裂音の有声・無声・有気の区別と、(2) 日本語「ラ行子音」の変異と、(3) 日本語母音 /i, e, a, o, u/ の音声的実現とを取り上げ、これらに関わる「内省」の訓練に、Praat とrtMRIの資料とをどのように利用することができるかをお話しします。 参考リンク https://praat.org https://rtmridb.ninjal.ac.jp
	2 限	社会言語学への招待 (嶋田珠巳・明海大学教授)
		社会言語学を始めたい人、知っておきたい人、「社会」と「言語」の掛け合わせになぜか心躍る人、あるいは「社会」の入らない言語学諸論を普段やっている人などを対象に、社会言語学の入門講義を行います。「社会言語学は広く、取り留めがない」というのは半分くらい本当です。それは日常の言語使用の表れをそのままに見ようとするところがあるから。「社会」で起こる言語の諸問題は数限りないから。言語を見るのに、特に「私たちが話す」という土台を切り離さないから。この分野が「ことばと社会」に関する様々な観察と事実の積み重ねのなかに常にあるから。社会言語学の特色をお話ししようとするさらに深入りすることになりますが、ここではこれくらいに。「取り留めがない」けれども「取り留める」ことをするというのが学問的課題ですから、そこにある楽しみに気づくかもしれません。担当講師の見てきたアイルランドの事例、アイルランド英語の例なども紹介しながら、「社会」を入れた視点が言語の研究にどのように活きるのか、具体的に考察します。
		認知言語学 構文と談話 (大堀壽夫・東京大学名誉教授)
		認知言語学では構文は言語知識を構成する記号単位と考えます。記号であるということは、形と意味の両方を（原則として）持っており、私たちはそうした記号を使って概念化と相互行為（ideation & interaction）を行うということです。この講義では特に構文がになう意味構築のはたらきに注目し、いくつかの具体例と一緒に見ていくことで、認知言語学的な見方の理解を深めることを目的とします。形式面では単純に見える構文も、文脈をどのように操作するかという観点からは複雑な面を見せます。比較相関構文（the more構文）や二重他動構文といった古典的なケーススタディを紹介した後で、投射構文（例えばwhat I'm saying is ~のような疑似分裂文）、Mensch構文（例えばich bin ein Mensch der ~「私って～な人なんです」）、中断節構文（例えば「もう大変だったんだから」）など語用論や談話分析と関連する構文の分析を通じて、「話し言葉の文法」への寄与の可能性を探ります。

	3 限	<p>実験音声学 (田嶋圭一・法政大学教授)</p> <p>実験音声学とは、音声を科学的に捉えるために実験的手法を用いて音声データを測定・分析する音声学の一分野です。本講義では、この実験音声学という分野について、講義を2つのパートに分けて概観する予定です。講義の前半では、この分野の全体像をつかむため、実験音声学の主要な研究領域のいくつかを取り上げます。音声の物理的特徴の分析、話し手による音声生成の生理的メカニズム、聞き手による音声の知覚と認知、母国語や外国語の音声の発達や学習、音声の方言差や時間的な変化などについて、具体的な研究例を交えながら紹介する予定です。講義の後半では、実験音声学の領域で頻繁に利用されるPraatというフリーの音声分析ソフトを用いて、この分野の主な研究手法のいくつかについて説明します。具体的には、(1) 音声を可視化して物理的特徴を測定・分析する方法、(2) 音声のピッチなどの特徴を人工的に操作した合成音声を作成する方法、(3) 音声を刺激材料として呈示する知覚実験の実例などを、Praat の操作画面を実際に示しながら紹介する予定です。このような内容を通して、話し言葉を自分の目と耳で客観的に観察する面白さを共有できればと思います。</p>
		<p>意味論 (酒井智宏・早稲田大学教授)</p> <p>意味論は理論言語学の中で一番とっつきやすい分野に見えて実は一番とっつきにくい分野です。その理由の一つは意味がどこにあるかわからないことです。音と単語と統語構造は、簡単にはいえませんが、がんばればある程度観察することができそうです(音韻論・音声学、形態論、統語論)、言語の使用は確実に観察することができます(語用論)。これに対して、「水」や「私」という語の「発音」でも「構造」でも「使用」でもなく、ただ「意味」を観察せよと言われても、どこを観察すればよいのかよくわからないでしょう。意味そのものの観察は難しくても意味の異同であればある程度観察することができると思われるかもしれません。「黒い猫」と「小さい鳥」は意味が異なり、「黒い猫」と「黒猫」は意味が同じ(同義)であるなど。では「エスカルゴ」と「カタツムリ」はどうでしょうか。「金」と「原子番号79の元素」は？これらの問いに対しては「意味が同じ」と答えても「意味が違う」と答えてもちょっと困ったことになります。春期講座では「意味の異同」という現象の難しさにふれてみたいと思います。</p>
		<p>言語哲学 (峯島宏次・慶應義塾大学教授)</p> <p>言語哲学は、哲学の中でも長い伝統をもち、特にフレーゲ以降の現代哲学では重要な位置を占めてきました。例えば、「人間の思考とはどのようなものか」とか「世界には何があるのか」とかいった大きな問いは、人間の言語を調べることで始めて接近できると考える哲学者がいます。このような哲学へのアプローチは現在、必ずしも多くの支持を集めているわけではありませんが、今日でも言語が哲学者の主要な関心事の一つであることには変わりありません。同時に言語哲学は、言語学の中でも特に意味論・語用論の分野と深く関係しています。言語哲学の概念や方法は、意味と指示、量化や様相といった「意味論」の周辺の話から、話者の意図、コミュニケーションや言語行為といった「語用論」の周辺の話まで、多様な領域で使われています。この講義では、理論言語学講座(後期)「言語哲学」への導入として、「名詞句の意味とは何か」という問いをもとにして、名前や記述、述語や量化など言語哲学の展開の中で重要な役割を果たしてきた概念について理解を深めたいと思います。</p>
	4 限	<p>生成文法Ⅱ 生成文法理論における記述と分析 (平岩健・明治学院大学教授)</p> <p>私たちヒトが普段使っている自然言語では意識的に認知できるのは意味形式と音声形式(手話言語の場合はジェスチャー)の二つです。どの言語でも辞書には音声と意味がペアで表記される形式になっているのはまさにそのためです。しかし自然言語というシステムは意味と音声だけで構成されているわけではありません。生成文法理論の重要な知見の一つは自然言語における「文」には単語の結合が文法原理に基づき回帰的に適用されることで生成される「統語構造」が存在し、この統語構造に対して様々な原理と制約が存在していることを明らかにした点にあります。この講座では生成文法理論における自然言語のデータの記述、発掘、そして一般化と分析を紹介したいと思います。</p>

2日目 4月12日 (日)	1限	英語史入門 (堀田隆一・慶應義塾大学教授)
		本講義は、英語史の入門として、インド・ヨーロッパ語族の遙かなる起源から、ゲルマン祖語を経て、古英語、中英語、近代英語、そして現代英語に至るまでの長大な歴史を体系的に概観していきます。講義では、征服、戦争、黒死病、宗教改革、印刷術の普及といった、言語を取り巻く社会的・文化的状況の変遷をたどる「外面史」を主軸に据えつつ、同時に、それらと密接に関わりながら、発音、文法（形態・統語）、語彙、綴字などの言語システム内部で生じた構造的変化、すなわち「内面史」を探っていきます。単なる事実の羅列ではなく、個々の変化における「5W1H（誰が、いつ、どこで、なぜ、等）」に焦点を当て、言語変化の背後にあるメカニズムや原理についても言及する予定です。講義の終盤では、数千年にわたる英語史を貫く変化の潮流を指摘し、現在の不規則で複雑な英語の姿を歴史的に解釈します。さらに、21世紀における「世界語」としての英語の現状と、未来の姿についても多角的に考察してみたいと思います。
		生成文法III 理論の背景となる考え方 (岸本秀樹・神戸大学名誉教授)
		生成文法が解明を目指すのは、自然言語の文法です。ここで言う自然言語の文法とは、私たちが頭の中に持っている文法知識を指します。私たちの頭の中にある文法がどのようなものであるかという課題の解決を目指すとしても、人間が観察・実験の対象となるのでいくつかの限界があります。そのなかで、生成文法は、人間言語の文法がどのようなものであるかについて仮説を設定して、それが正しいかどうかを検証し、最終的に人間言語の普遍的な知識を探ろうとします。人間の頭の中にある文法メがどうなっているかについては、いくつかの観察からこのような形でなりたっているのではないかという理論の背景となる考え方があります。この講義では、生成文法のバックグラウンドとなる考え方について解説する予定です。
	2限	認知言語学 'copula'としての「ナル」とその周辺 (池上嘉彦・東京大学名誉教授)
		2025年11月24日、日本言語学会公開シンポジウム（於岡山大学）で基調講演として話したものの一部を取り上げます。出発点は、次のような例文です： 「熱帯低気圧ガ台風ニ変ワル／ナル／発達スル」 「子供ガ大人ニ変ワル／ナル／育ツ」 話者が「ナル」、あるいは「変ワル」という語を選ぶことによって＜出来事＞（つまり、何かが＜発生／出来（しゅったい）する＞という現象）を語る場合、両者の間でどのように違った受けとめ方（＜事態把握＞）がなされているのでしょうか。文法的に「ナル」は 'copula'（「連（結）辞」）という部類のものであるのに対し、「変ワル」はごく普通に＜動詞＞とよばれるもの——この差は両者の間でどのように違った＜事態把握＞（construal）がなされているということになるのでしょうか。そして、現代の日本語話者として私たちが言う「自ずから」（おのずから）と「自ら」（みずから）という区別、「なれの果て」と言っ て人の零落を冷然と見下す眼差し——これらは、どこから生まれた（なり出て来た）のでしょうか。 当日の話のためにハンドアウトが用意されますので、各自前もってダウンロードしておいて下さい。
		語用論 なぜ失言や誤解をしてしまうのか (松井智子・中央大学教授)
		SNSでのコミュニケーションで、相手にうまく伝わらなかったなと思ったり、言い方を間違ったな（失言してしまったかも）と後悔したりしたことはありませんか。その一方で、後で振り返ってみると、自分も相手が言ったことを誤解していたかもと思い当たることがあるかもしれません。語用論では、こうしたコミュニケーションの失敗がなぜ起こってしまうのか、説明しようと思います。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、私たちは言葉の意味を解釈すると同時に、話し手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることになります。ただし、誰もが経験することですが、私たちにとって、相手の心を正確に読むことは難しく、誤解につながることも少なくありません。とくに、SNSのように、相手が直接に見えない状況では、相手を理解することは特段に難しくなります。この講義では、関連性理論の考え方を学びながら、なぜ相手の見えないコミュニケーションは難しいのかを検討することで、後期の理論言語学講座で取り上げる内容の導入としたいと思います。

	3限	言語類型論 日本語は珍しい言語か？ (長屋尚典・東京大学准教授)
		<p>世界には7,000を超える言語が存在すると言われ、その構造は大きく異なる一方で似ているところもあります。言語類型論とはそのような多様性と共通性を、世界の言語の特徴を比較することによって明らかにしようとする言語学の分野です。その成果を学ぶことは、人間言語についての我々の理解を深めるだけでなく、個別言語を分析する際にも役に立ちます。</p> <p>この講義では、我々がこうして使用している日本語について言語類型論の観点から考えてみたいと思います。特に、日本語が珍しい言語なのかをさまざまな側面から考えてみます。具体的には音韻、語順、受身、敬語、文字などの特徴について考えてみる予定です。それを通して、言語類型論のおもしろさについて紹介したいと考えています。</p>
		日本語文法理論 少し変な文の意味を理解する (天野みどり・大妻女子大学教授)
		<p>実際の言語使用場面では、しばしば「少し変な感じがする」文に出会います。例えば次の例はいかがでしょう。「外に出たところでベレー帽をなくしたことに気づきました。場内では脱帽してくださいとのアナウンスがあったので、脱いでポケットに押し込んでいたのが、ショーに夢中になっている内に落としたりしいのです。」(河合宣雄(2024)『旅好家とめぐるパリ・モンサンミシェル』(ごま書房新社)より) ...全く不自然さを感じない人、少し違和感がある人、様々だと思います。違和感があるとしたら、それはどこで、その違和感の理由は何なのでしょう。この講義では、少し変な感じがする文をいくつかとりあげ、その文の成立に「構文的知識」が関わるという考え方を述べ、後期に行う現代日本語の構文に関する論考の導入にしたいと思います。この講義では、構文とは、実際の言語使用の中で生まれたり拡張したりするものと考えます。つまり、「構文的知識」とは言語使用者であるすべての皆さんに、すでに使用の蓄積によって身につけているものなのです。受講生の皆さん自身の「構文的知識」を改めて考える機会となり、文法研究の面白さを発見いただければ幸いです。</p>
4限		心理言語学 はじめての言語獲得研究 (杉崎鉦司・関西学院大学教授)
		<p>日本語を母語とするおとなは皆、「なぜその箱を開ける前に太郎は手を洗ったの？」と尋ねられた際、尋ねられているのは「太郎がその箱を開ける理由」ではなく「太郎が手を洗った理由」であると判断することができます。私の過去の研究において、調査方法を工夫することにより、日本語を母語とする4歳児がこのような質問に対してどのような解釈を与えるかを調査してみたところ、おとなと同様に、上記の質問は「太郎が手を洗った理由」を尋ねる疑問文であると解釈することが明らかになりました。生後4年しか経っていない子ども達なぜおとなと同じ解釈のみを与えることができるのでしょうか。生成文法と呼ばれる言語理論では、人間に生まれつき備わっている母語獲得のための内的メカニズムが存在し、母語知識の獲得においては(生後に取り込まれる言語情報に加えて)その仕組みが重要な働きを担っていると考えます。この授業では、生成文法理論に基づく母語獲得研究の基本的な考え方とおもしろさを、上記のような事例をもとにわかりやすく説明したいと思います。</p>
		形態論・語形成論 英語語形成の世界 (長野明子・静岡県立大学教授)
		<p>語(word)はごく小さい単位でありながら、探索するに十分な精巧さを備えています。形態論(morphology)と語形成(word-formation)は、一緒にして語られることの多い言語現象ですが、詳しく見てみると、かたや語の外側、かたや語の内側という、別のドメインに関わるものであることがわかってきました。本講義では、まず英語史における形態論の変化を概観し、次に語形成の変化を見ていきます。そして、これらの変化を引き起こした要因を検討し、それを踏まえて最後に「英語の語のこれから」を予測してみたいと思います。</p>